第5号　Institute for Interdisciplinary Studies KONAN University　1987年3月31日

甲南大学
総合研究所所報

甲南大学総合研究所　神戸市東灘区岡本8－9－1　電話(078)431－4341

研究報告会を開催

総合研究所は、１９８６年１２月３日および１０日、図書館視聴覚ホールで、第２回および第３回研究報告会を開催した。第２回研究報告会では、「シンボルと元型に関する研究」の研究グループが母体となって、総合研究所の事業として86年夏に行なわれた「オーストラリア心理人類学研究」の研究成果が報告された。本研究は、上記チーム中の心理学・人類学の研究者が中心となり、チーム外から、文学部森田三郎助教授（人類学）を加えて行なわれたものである。続いて、第３回研究報告会では、「アメリカの社会と文化」の研究グループより、法学部丸田隆教授の「世紀転換期のアメリカ社会とルイス・ブランダイス――ソーシャル・ダーウィニズムからプラグマチズム法学へ」と、文学部森田三郎助教授の「多民族国家アメリカの生成――フランツ・ボアズの移民観を中心に」が報告された。以下、各研究報告の要旨を掲載する。

シンボルと元型に関する研究

文学部教授　藤岡喜愛　「オーストラリア研究の意義」

文学部助教授　森田三郎　「多民族都市ダーウィン」

文学部教授　岡田康伸　「コスモスのイメージとしての箱庭」

藤岡研究員からは、本調査研究の意義と目的の概略が述べられた。オーストラリアは、近年日本との交流が盛んになり、経済的にも文化的にも今後ますます重要となるであろう国である。しかし経済的にはともかく、文化的相互理解はまだまだ充分とは言いがたく、今後いっそう研究がなされるべき国である。近年、国立民族学博物館などで、研究が継続的に行なわれてきており、本研究もその流れをふまえて行なわれたものである。一方、箱庭技法という心理技法が心理治療の手段としてヨーロッパから導入されて以来、我が国では、数多くの作品例があり研究が重ねられている。そこで、日本以外の国で箱庭作品を収集し、日本の作品と比較することで、箱庭理解をいっそう深めたいという願いが心理学のスタッフの中に芽生えていた。この二つの動きによって生れたのが本調査研究である。

研究背景についての説明の後、森田研究員によって、本調査の対象となったダーウィンという都市及びオーストラリアについて、その社会的文化的環境が、本調査で集められた多くの統計資料に基いたグラフや地図を用いて紹介された。ダーウィンは、オーストラリアの北部に位置している。オーストラリアは都市国家としての性格が強く、都市によって非常に性格が異るが、ダーウィンは特に、シドニー、メルボルン、その他どの都市とも違う性格を持っている。州都であり、北部行政の中心地であるが、他の地方から孤立しているため、他地方のオーストラリア国民から特殊な目で見られがちである。気候的には、一年中最高気温が30度を越し、乾期と雨期の二期に大きく別れている。オーストラリアは移民が多く他民族国家であるが、ダーウィンは特にアジア諸国からの移民が多い。また1974年のサイクロンに

よって、多くの市民が他市へ移住し、その後再建された。それ以外にも人の出入の激しい都市で、定住者が少ないことを特徴としている。しかし近年には、人口も増加し、近代都市として発展しつつあるということができる。

これらの背景をふまえて、岡田研究員によって、今回の調査で収集された箱庭作品に関する報告があった。まず、箱庭技法についての説明があり、心の中の「世界」が表現されるものであることが述べられた。その例として日本人の作品や、中でもマンダラと呼ばれるパターンの写真が紹介された。オーストラリアの作品は、中学校、高校、大学の三ケ所において、合計249例が集められた。数量的分析は現在進行中だが、集められた箱庭が写真によって多数紹介され、オーストラリアの特徴が視覚的に示された。まず全体的に特徴を言えば、日本と比べて玩具の数が多く、豊かな印象を与える。細部の表現に工夫が見られ、エネルギーが日本の生徒に比べて高い。これは、特に中学校において著しく、それに比べれば高校では、いくぶん社会化がすすみ定型的な表現が増えているなど、いくつかの特徴が紹介された。

発表会後、場所を移して懇親会が持たれ、本プロジェクトの成功を祝い、今後の研究所の発展を願って閉会となった。

アメリカの社会と文化
――世紀転換期のアメリカ社会の構造分析――

法学部教授　丸田隆　「世紀転換期のアメリカ社会とルイス・ブランダイス――ソーシアル・ダーウィニズムからプラグマチズム法学へ」

文学部助教授　森田三郎　「多民族国家アメリカの生成――フランツ・ボアズの移民観を中心に」

まず、丸田研究員の報告内容は、以下のとおりである。

合州国憲法は、個人資本家の自由な投機と富の蓄積を個人的自律能力の自由な発露の形態として保障してきた。しかし、アダム・スミスの「見えざる手」は、資本家の財の集中とそれに伴う貧富差の拡大や社会的諸矛盾の是正にまでは「手」がまわらなかった。

１９世紀末から２０世紀にかけて、いわゆる世紀転換期のアメリカでは、農業地域においては、独占資本との対抗関係のなかで、全国的規模の農民運動（例：グレンジャー運動）が、都市部では、過酷な労働条件に置かれた労働者たちの労働争議が頻発していた。独占資本は、例えば、穀物倉庫の価格や鉄道運賃を大幅につりあげ、農民を窮地に追いこみ、他方で、都市労働者のストライキや生活のための闘争を「公的権力」の圧力でねじふせた。社会的諸問題や諸矛盾は、その当面の解決のために議会や裁判所にもちこまれたが、社会的弱者救済のための政策や法は、憲法の古典的自由権によってその実現がはばまれた。経済力の差による明白な法的力量上の優劣が現実となっているにもかかわらず、「個人資本家の自由な活動」イコール「能力」とする古典的憲法価値観が墨守されたのである。

このような時代にあって、多くの法律家が、「企業弁護士」として、独占の側で活動するのに対し、ルイス・ブランダイスは、一貫して、労働者と独占に規制される側の弁護を引受け、「人民の弁護士」と称された。彼自身は、革命失敗後のプラハから米国に流れてきたボヘミア系の移民の子である。彼は、そのような両親の影響下で、古典的正義の墨守よりも社会的弱者を救済する相対的正義の実現が大切だとし、自らの使命を、独占資本に対抗する活動の中に見出している。彼を有名にしたのは、オレゴン州での婦人労働者の労働時間を制限する州法の合憲性を争う裁判においてである。いかなる理由であれ、労働時間を自由に決定するという私的契約の自由を侵してはならないとする主張に対し、彼は、いかに労働時間制限が社会的必要を有するかについて、諸外国の事例、医学上の見解、労働経済学からの見地等を提示して、同州法の合理性を示し、合憲判決を勝ちとった。この書面は、「ブランダイス・ブリーフ」として知られるが、古典的自由権から、社会的自由権への移行の引き鉄になったものといえよう。本テーマでは、この法律家ブランダイスを通して、独占規制の法をめぐる巨大企業と都市労働者や農民との確執が世紀転換期の特徴として明らかにされる。

次に、森田研究員の報告内容は、以下のとおりである。

フランツ・ボアズ（1858-1942）が初めてアメリカに入国したのは1884年から翌年にかけての冬であった。1848年の３月革命によって自由の空気を味わったドイツのユダヤ系ブルジョワジーの後継者たちにとって当時のアメリカは、彼らの理想を体現する夢の国そのものに見えた。事実、ボアズも1887年、結婚とともにアメリカ永住を決意する。

移民たちに自由と成功の機会を約束するというアメリカン・ドリームの陰の原動力となっていた西部フロンティアの消滅が宣言されたのは1890年である。このような環境のもとで、国内では先着移民（WASPを核とする西欧、北欧系の旧移民）による後発移民（東欧、南欧、ユダヤ人などを中心とする新移民及びそれよりさらに遅れてきたアジア系移民）排斥運動が激化してくる。対外的には、膨脹主義（帝国主義）的政策が目立ってきた。ボアズがアメリカ国民となってわずか三年後のことである。

彼は生涯に700を越える論文、著書、記事などを書いた。クローバー、ハースコヴィッツ、ベネディクト、ミードなどそうそうたる俊英たちを育ててアメリカ文化人類学の父と呼ばれるにいたったボアズは、まさにアメリカン・ドリームの体現者たるにふさわしい。才能のある者としてボアズは報われたのである。

しかし、典型的な新移民としての彼は、原住民インディアンや新移民、アジア系移民に対する人種的偏見を座視することができなかった。彼は多くの調査報告書や講演によって人種主義的思潮に挑んだ。それらの努力が生前に報われることは少なかったが、第二次大戦後になると彼の蒔いた種は着実に実を結びつつある。

世紀転換期にあって、アメリカン・ドリームを体現し、生涯を通じてその理想の実現のために戦いつづけることによって、ボアズはアメリカの良き伝統を守ったのである。

昭和61年度共同研究中間報告

平生釟三郎の総合的研究

研究チーム　三島　康雄（営）　高阪　　薫（文）
　　有村　兼彬（文）　安西　敏三（法）
　　杉原　四郎（名誉教授）
　　柴　　孝夫（京都産業大学）

私共六名による平生研究は、第Ⅰ期のそれが『日記』を中心とするものであったのに対し、第Ⅱ期は、単に『日記』に限定されることなく、多角的に関連資料を集めての平生研究である。そしてこの研究過程における副産物ではあるが、しかし平生研究のみならず、平生の人となりを知る上で貴重となる『平生釟三郎講演集』をこの５月に出版する運びになっていることは、本年度の一研究成果としても特筆すべきことである。すなわち平生の夥しい講演の中から、私共共同研究の参加者が抜粋編集し、校注を施して(1)教育(2)社会(3)文化(4)経済・経営(5)国際問題(6)欧文の六部に分類して平生の生の声ともいうべき講演を公に付することになったのである。主として、教育の部は安西が、社会・文化の部は高阪が、経済の部は杉原が、経営の部は三島が、国際問題の部は杉原が、そして欧文の部は有村が、それぞれの責任において校注を施し、数次にわたる研究会をも兼た編集会議を行い、これまでにその例をみない平生のまとまった著作として、平生の縁者の協力をも得て公刊するのである。これは甲南学園関係者のみならず、日本近代史の資料として様々な方面から、様々な視点から読まれるであろうことを確信する。

個別的に研究参加者の研究を紹介すれば、まず、杉原は引き続き平生の経済思想を、自由通商協会と平生との係わりを通して、昭和初期の貿易問題およびそれに対応する大阪財界ないし実業界のリーダーとしての平生の役割を中心として、より深くより多角的に検討している。次に三島は、関東大震災時における正に火災保険事業そのものの在り様を問わざるを得ない状況下における平生の保険思想を検討している。高阪は、平生と平生が東京外語学校露語科時代の同級生であったあの『浮雲』の作者として、あるいは『めぐりあひ』等の優れた翻訳者として、さらに『小説総論』等の評論家として日本の近代文学形成に多大な役割を果した二葉亭四迷との比較を、主として一方は実業界へ、他方は文学界へとの歩みの分岐上の問題をからませつつ青春像の有様の視点から考察している。平生は東京高等商業学校（現・一橋大学）へそのまま進むが、二葉亭は道を同じくすることはなかったにも拘らず平生と一度

会っているとの事実もあり、興味ある問題である。有村は、平生が唱えた漢字廃止論の問題を広く日本語の世界一般から浮を彫りにしようとしており、それは国字改良論を唱え、かな文字会を創立した山下芳太郎と平生の弟子ともいうべき伊藤忠兵衛をも加えた平生の交際関係を通してより一層明らかになるであろう。柴は川崎造船所社長時代に平生が如何なる労務政策をとっていたかを検討しつつある。最後に安西は平生の政治観の形成と、平生の文部大臣時代及び枢密顧問官時代の政治家としての機能の問題を広く同時代の他資料についてもあたることによって検討している。また平生の『日記』を綴る以前の平生を知る上で貴重な資料たることを失わない平生の『自伝』を章分け、小見出し、それに注等を施して、『甲南法学』誌上に公表していく予定で仕事を進めてもいる。

第Ⅱ期平生研究は第Ⅰ期のそれを踏まえつつ上述の如く進行しているが、これからの成果を一冊にまとめる話しも出ていることを付言しておこう。

(安西)

ヴィクトリア朝文化の研究

研究チーム 松村　昌家（文）　村岡　健次（文）
高橋　哲雄（経）　田中　真晴（経）
中島　俊郎（文）

1986年5月14日に第1回目の会合を開き、研究活動方針を協議したあと、松村が「ヴィクトリア朝文学にあらわれた父と子」についての研究発表を行なった。問題にされた作品は、ディケンズ『ドンビー父子』、メレディス『リチャード・フェヴァレルの試練』、S. バトラー『万人の道』、ゴス『父と子』、そしてJ. S. ミル『自叙伝』等々。ヴィクトリア朝の中流階級の間に、家庭や教育が強く意識されるにつれて、父親の権威が増大した。彼ら父親たちの息子育成のシステムが、それぞれの作品、自叙伝において息子たちにどのような反応を起こさせ、そして多くの場合に父親たちが、どのような期待はずれを経験したかを通観して、この問題が今日のわれわれと無関係でないことを論じた。

ついで第2回例会（6月14日）においては、村岡健次が「スポーツの発達過程――フットボールを中心に――」の研究を発表。この例会は、イギリス資本主義研究会との合同集会として開かれたが、ここで村岡は、中世から今日に至るフットボールの発展史を「(1)前工業化時代」「(2)1820――60年度」「(3)1870年代以降の現代」の三つの時期に分けて考察し、その発展過程の定式化を試みた。(1)の前工業化時に広く民衆娯楽として普及していたフットボールが、(2)の時期にパブリックスクールにおいて近代的スポーツとして確立され、(3)の時期に再び一般的大衆のスポーツとして今日的形態をとるに至った、というのがその骨子である。

このあと夏季休暇中に、高橋哲雄がイギリスに4週間の出張を行ない、調査と資料の収集につとめ、松村は7月初旬にレスター大学・ヴィクトリアン・スタディズ・センター設立20周年記念大会に参加した。ここで甲南、レスター両大学間の研究上の交流についての合意を得ると共に、日本の諸大学におけるフィリップ・コリンズ名誉教授の講演日程を協議、その結果甲南大学では、10月30日に氏の講演会が実現した。

10月8日の第3回例会では、田中真晴が「マーシャルとミル」と題して、概略つぎのような研究発表を行なった。ヴィクトリア朝末期を代表するA.マーシャルは、ヴィクトリア朝中期のJ. S. ミルから多くのものを継承すると共に、また著しい対照を示している。経済思想において貧困・労働者階級の問題が両者の関心の焦点であるが、ミルが協同組合に希望を託して、それによる労働者階級と資本家階級の対立の解消を考えたのに対して、マーシャルは教育による階梯的上昇を考え、またミルの女性の自立論とは異なって、ヴィクトリア朝的家族を労働者にも要望した。

11月19日に開かれた第4回例会では、松村が、先に述べたレスター大会・ヴィクトリアン・スタディズ・センター記念大学の模様、ならびにロンドンのディケンズ・ハウスで徒事した文献作成の経過を報告、ついで松村著『水晶宮物語――ロンドン万国博覧会1851』についての合評会が行なわれた。

このあと第5回例会が今年の1月22日に開かれた。ここでは高橋哲雄が「探偵小説とスポーツ」という題のもとに、単行本として刊行予定の「ミステリーの社会学」の序章部分を発表、「発生の時間的・場所的一致」、「ゲーム性」、「クラブ性」、「アマチュアリズム」、「ルール性」等を通じて、推理小説とスポーツとの共通性が説き明かされた。続きは、*EQ*（光文社）誌上に、5月から6回にわたって連載される予定になっている。

2月25日には中島俊郎が、リットン・ストレイチの『エミネント・ヴィクトリアンズ』について研究

発表を行ない、5月から6月にかけては、杉原四郎名誉教授を加えて全員参加のもとに「近代イギリスの文化と社会」をテーマにした公開講座を開く予定である。（松村）

視覚認識機構の共通性を探る

ー昆虫から人までー

研究チーム　加地早苗（理・生）　上水流伸子（体）
藤原儀直（理・生）　道之前允直（理・生）
中島英治（大阪府大総合・生命）

我々人間をも含めて、動物がどのようにして光を感じ、物を視ることができるのか。これは古くから人々の関心をそそってきた問題である。動物が光をたよりに周囲の状況をとらえ、それに対処する適確な行動をとることができるのは"眼"という光受容器を発達させてきたからにほかならない。そこには光を感じる細胞があり、光の強弱や、色光を認識することができる。また光の方向や形の認知には情報処理を司る神経系と、それをささえる眼の構造や配置などがととのっていなければならない。従って、光感覚とは単なる感光現象ではなく、さまざまな機構の上に成り立つ高次の能力である。本研究はこのような機構の一端を行動遺伝学や運動生理学の手法を用いて探ろうとするものである。

1）　光感覚の初期過程について、

光感覚の初期過程は感光性色素の光化学反応に基ずく視細胞の光受容機能の存在が基礎となっている。視細胞に含まれる感光性色素（ロドプシン）は不溶性蛋白質オプシンと11－cis 型レチナールが結合したものである。11—cis 型レチナールは光刺激を受けると全 trans 型へ異性化し、視細胞膜に光感覚を起こす。光を連続して受け取るには常に11－cis 型レチナールが視細胞に供給され、一定量が維持されていなければならない。動物はどのようにして11－cis 型レチナールを獲得しているのかを明らかにするため、視物質を欠失したモデル動物を用いて検討した。

プロビタミン（生体内でビタミンA作用物質に転換される物質）を完全除去した合成飼料を用い、視物質をもたないショウジョウバエの作成に成功した。この個体に各種レチノイドやカロチノイドを添食し、視物質への転換量を測定した。その結果、レチナール$_1$,ß－カロチンやキサントフイルは視物質に転換されるがレチナール$_2$やアスタキサンチンは転換されないことがわかった。淡水魚やイカではレチナール$_2$を視物質色素団に用い、ネズミやヒトもこれらの物質を利用する（添食により夜盲症が回復する）。よって、ショウジョウバエのみがレチナール$_2$やアスタキサンチンを利用することができないものと思われる。

2）　色調弁別能及びその閾値の決定

ショウジョウバエの行動異常突然変異種 pyokori 系統は光源を点滅すると"跳びあがる"ような行動を示す。同行動を示標として、各種の波長下で点滅刺激を与え、色調弁別能を解析した。単色光源として大型スペクトログラフ装置（高さ50cm、巾1cmで1nm に相当する人工虹作成装置）を用い、600～300 nm の範囲 pyokori 行動の誘発率を調べた。600～400 nm の長波長域ではまったく pyokori 行動が検出されなかった。しかし、380 nm よりわずかに pyokori 行動が現われ、360 nm において最も高い反応が検出された。これらの事実は、ショウジョウバエが360 nm の紫外線を受光し、他の色光と弁別認識することができ、同時に、明暗差（明るさ）をも認識することができたものといえる。

今後、1）については、全 trans を11－cis に異性化する機構を調べ、2）については、本研究において開発、作成した顕微分光装置を用い、視細胞レベルでの波長弁別能を明らかにしてゆく予定である。また、これらの結果とヒトあるいは他の動物における実験結果と比較検討し、その共通性を明らかにしてゆく予定である。（道之前）

戦後日本の経済文化

研究チーム　小松　陽一（営）　藤本　建夫（経）
杉村　芳美（経）　鶴身　　潔（営）
吉沢　英成（経）

今日、国民の9割近くまでが、いわゆる「中流意識」を持っている。この社会現象をいかに把握するかは、時代の課題となっており、多種多様な大衆社会論が提起されている。それらの多くは評論風止まりであり、それだけに今や立ち入った、しかも多面的な分析が要請されている。本研究は、「経済文化」という視点から上記の課題にアプローチすることを目的としている。

各担当者による現在までの研究の進展状況は以下のとうりである。

「企業文化考」（小松陽一）

野中・沼上（1986）に従って、企業文化とは、組織のメンバーの思考や行動に共通の様式ないし型を与える「知識」や「価値」、より具体的には、暗黙に共有された「認知・行動様式」を意味する。その

最も根幹をなすのは、その企業の持っている価値であり、多くの場合それは経営理念で表明される。

「企業文化考」では、戦後日本を代表する企業経営者の一人である松下幸之助氏の経営理念の特質を分析的に明らかにし、松下電器産業(株)の経営との関連において、その有効性の変遷を明らかにしてみたい。

「教育文化考」(藤本建夫)

昨年9月に大手進学塾「浜学園」が、受験に役立たぬ公教育は優秀児には「拷問に等しく、基本的人権侵害で憲法違反」だと、公教育を批判する文書を父兄に配布した。これは、一方で受験指導を徹底できず、しかし他方で受験を無視できないために人格形成教育に全力を投入しえない公教育の弱みを巧みに衝いた文書で、ここには同進学塾の隆盛と並々ならぬ自信が窺われる。確かに現在、私立の進学塾は日本の教育制度のキイワードのひとつとなっている。これはいつごろから、どのような文化的・社会的・教育政策的背景から生まれてきたのだろうか。

「生活文化考」(杉村芳美)

「生活文化考」では、戦後日本の高成長・富裕化のもとでの「生活」の変質とその意味について考察をすすめている。ここで焦点になる現象は、高度産業化の進展にともなう、モノと情報の生活への大量の侵入による生活様式・生活意識の平等化・均質化であり、長時間労働と消費型余暇活動に代表されるようなビジネス文化の生活への浸透によるゆとりの喪失である。戦後生活文化のこのような到達点の意義を、日本的大衆化の一側面という観点からさらに考えていきたい。

「ローン文化考」(鶴身　潔)

戦後、我国経済・社会の発展過程において生じた生活環境の変化に伴って人々の欲求が弾力的に変化し、それが既存の硬直的であった社会的価値体系の変革を通じて新しい生活様式を生み出してきた。それとともに個人の消費者意識や生活における価値観は変貌を遂げ、戦前の禁欲倫理に代るものをもたらした。さらに高度成長期を過ぎて企業に代る資金需要先の新たな開拓を迫られた金融機関の大衆化路線があった。消費者信用が我国金融機構の中に定着し、注目されるようになったのはこうした背景からである。

「貨幣と民主主義」(吉沢英成)

戦後日本の議会制民主主義と貨幣の関係は、たとえていえば、日本銀行の金庫の中に金地金をしまっておく代りに、金庫の中に道をつけ奥へ奥へと掘って、首相官邸と衆議院の議場へ通ずるようにしたといった態である。政治は、選挙からはじまって多様に金がかかるのだが、他方、政治は金を創りだしもする。政治の産業化、産業の政治化、産業の情報化、選挙の産業化はすべて貨幣をパイプに展開される。民主主義はこのようにプルトクラシーとして確立する。戦後日本の民主主義はこのことを顕著に物語っている。

昭和62年度研究課題および研究チーム

〈研究所委員会企画のもの〉

アメリカにおける子ども。その文化的・社会的意味

◉研究内容の概要

アメリカにおける子どもに関するイメジを研究する。アメリカの実社会における子どもの位置と、アメリカ思想史の流れの中に現われる子どものイメジとの間にある落差について検討する。そうすることによってアメリカ人の思考のパターン、さらにはアメリカ文化の特色を探ることが研究の最終目標である。

◉研究の特色

子どものあり方、その扱われ方を検討することによって、アメリカの文化的特色を見ようとするアメリカ研究は、これまであまり考えられなかったアプローチである。この研究はさまざまな展望を得る可能性を持つものと思われる。たとえば、ヨーロッパという親に対する子としてのアメリカというとらえ方に原因するアメリカ人のヨーロッパに対する観念複合に新しい光を当てることにもなろうし、American exceptionalism という概念にもかかわりを持つ研究となり得る。

◉総合研究として研究することの必要性

この様な研究は複眼的視野を備えた共同研究体によるのが最も効果的である。むしろ、さまざまな異なる研究分野にたずさわる者の相互協力によってはじめて可能となるものである。

◉研究チームと研究の分担（◦は研究幹事）

松尾　恒子（文）カウンセリングやケースワークの事例による研究

青山　義孝（文）19世紀アメリカ文学作品に表現された子どもの姿

大森　義彦（文）現代アメリカ文学作品に表現された子どもの姿

斎藤　豊治（法）アメリカにおける少年非行の問題

ロバート・クロウフォード（イリノイ大学）現代アメリカ社会における少年問題

◦谷本　泰三（文）思想的、神学的アプローチ

〈公募によるもの〉

イメージと文化に関する研究

◉研究内容の概要

芸術、宗教、その他あらゆる人間の文化の中には、共通のシンボルやイメージがしばしば見出されており、例えばC.G.Jungの「元型」という概念は、人間の無意識内に、人類共通の「型」を想定することによって、その共通性を説明しようとするものであった。それらのシンボルやイメージは、さまざまの学問領域において研究されているが、方法論や視点の違いから、学問間相互の交流によって共同研究を行なう機会は少ないと言わざるをえない。

本研究は、昨年度まで行なってきた「シンボルと元型に関する研究」の成果をふまえ、「イメージ」という概念を使うことによって、各学問分野にわたる共通領域をとらえようとするものである。あらゆる文化の研究は、人間の心に生起するイメージを扱っているとも考えられ、「シンボル」も常にイメージとして意識内に現れる。本研究では、「シンボル」を焦点に置きながら、性急に「元型」などの概念に還元せず、イメージそのものを重視して学際的に研究するものである。

◉研究の特色

人間の文化については、現在まで、さまざまの学問領域においてそれぞれの方法論に基く研究の蓄積があるが、それらの学問領域の壁を越えて、広い分野にわたる研究者が集まり、共通の理解を獲得することを目的とする。「イメージ」という概念を用いるのは、多くの分野にわたる共通領域をとらえるための試みである。

◉総合研究として研究することの必要性

本研究は、今までの学問領域の境界を越えて広がる領域を扱うことをその目的としており、学際的研究が不可欠である。具体的には、歴史、芸術、文学、宗教、哲学、心理学など人間の文化を扱うあらゆる研究分野から広い範囲の研究者を含むようにする。

◉研究チームと研究の分担（◦は研究幹事）

井上　忠司（文）生活文化の中のシンボル

上村　邦子（文）神話とシンボル

岡田　康伸（文）箱庭療法を通じてのシンボル

デビット・ライクロフト（文）童話の象徴的研究

高坂　　薫（文）沖縄の文化とイメージ

谷口　文章（文）哲学と深層心理学

谷本　泰三（文）アメリカ文学における象徴性

寺島　樵一（文）日本古典詩歌の中のシンボル

永友　育雄（経）文化研究としての経済学

西田　英樹（文）ドイツ文学、イメージの深層

久武　哲也（文）砂絵と岩絵のコスモロジー

◦藤岡　喜愛（文）心身一如とイメージ

藤本　建夫（経）M.ウェーバーの宗教社会学における予言者たち

堀　　直（文）中央アジア史と民話――ウイグルの場合――

松尾　恒子（文）東洋と西洋におけるアニマ・アニムス

森　茂起（文）ユング心理学と夢におけるシンボル
衣笠　茂（大手前女子大学）ギリシャの神話と文化
市川　浩（明治大学）空間論と身体象徴
上原　輝男（玉川大学）心意伝承におけるイメージ
加藤　隆久（神戸女子大学）神社の歴史とイメージ
河合　隼雄（京都大学）ユング心理学から見た神話とおとぎ話
小坂　英世（小坂医院）漢法医学におけるイメージ
西際　好誉（香道）日本文化の三種神器
樋口　和彦（同志社大学）ユング心理学と宗教
和田　邦平（県立歴史博物館）日本文化に見るイメージとシンボル

海浜社会の伝統と変容 ― 志摩半島・海女集落のエスノグラフィー ―

◉研究内容の概要

志摩半島には、いまでも多くの海女集落がある。それらは、互いに相似ていると同時にまた個性的でもある。本研究では、志摩町・布施田地区を対象として、まず、道之前研究員（生物学・生態学）が、地域の自然環境の現状を海陸にわたって調査する。久武研究員（人文地理学・歴史地理学）は、現地の観察・聴きとりに加えて古今の地図を収集し、その分析を通して、地域環境の歴史的変遷を考察する。これに対して三島研究員（日本経営史・漁業経営史）は現地の主産業である海女業と真珠産業の形成と展開および両者の関連についての調査を担当する。また、プラース研究員と中田研究員（ともに文化人類学）は、個人としての海女および漁民たちに目をむけ、Life History の収集分析をおこなうことにより、彼らの人生コースを具体的に把握する。一方、森田研究員（文化人類学）は、地域のイベントおよび住民の交際を時間的・空間的ネットワークとしてとらえ、地域としての海浜社会の特性を追求する。井上研究員（文化心理学）は、以上の分析をふまえると同時に、現地での観察および聴きとりを通して、海女や漁民たちの行動とパーソナリティの特性を追求する。また金研究員（民俗学）は、布施田集落を、済州島の海女集落と比較することにより、海浜社会およびそこに住む人びとの特性の普遍性と個別性の度合を考察する。

以上の共同研究を通して、布施田の地域社会の特性と、海女を中心とする住民の具体的な生活実態および生活感覚を明らかにすると同時に、日本社会における海浜社会の位置づけを試みたい。

◉研究の特色

これまで多くの日本研究がなされてきた。しかし、その多くは日本を農村から見る立場のもので、山村、漁村から日本をみる視点は極めて不足していた。

こうした山村、漁村から日本を見る視点の欠如は、日本の村落社会の主要形態が日本中どこでも似通っているといった見方や、日本及び日本社会理解が農村的ステレオタイプに終始しがちな一因となっている。

そこで、本研究では、農村から海浜にその視点を移して、日本文化の多面性の発見への道をひらき、従来のステレオティピカルな日本理解の再考を促そうとする。

◉総合研究として研究することの必要性

海と陸に展開するダイナミックな海浜社会の具体相にせまるには、生態学から個人史までを含む多角的視点が欠かせない。これを可能とするのは、学際的人々の相互協力による研究体制である。分野を異にする人々の協業は、専門の細分化によって失ってきた対象への総合的（ホリスティック）アプローチを可能とし、かつ海外の研究者の参加は、日本人研究者とは異なるさらに客観性豊かな活発な議論を保証する。

◉研究チームと研究の分担（◦は研究幹事）

井上　忠司（文）海浜社会の文化心理
久武　哲也（文）海浜の環境利用の地図的表現
三島　康雄（営）経営としての海女業と真珠産業
道之前允直（理）海浜生態学 ― 魚介分布を中心に ―
◦森田　三郎（文）ヒューマンネットワーク基地としての布施田コミュニティー
中田　睦子（親和女子大）海女業に生きる女性のライフ・コース

デビット・プラース（イリノイ大学）海女とトマエの個人史的研究
金　栄敦（済州大学）日韓海女の比較研究

戦後日本の社会文化

◉研究内容の概要

本研究チームの６名は、昭61年度に発足した研究チーム「戦後日本の経済文化」――小松陽一(営)、藤本建夫(経)、杉村芳美(経)、鶴身潔(営)、吉沢英成(経)――の月例研究会に既に実質的に参加しており、２年後には両チーム11名で共同の研究成果をまとめることを目ざしている。

現代日本は、「不確実性の時代」、「脱工業化社会」「高度情報化社会」、「シミュレーションの時代」、「ポスト・モダン」、「分衆」、「柔らかい個人主義」等々の段階にはいりつつある、と言われる。これらの時代規定にほぼ共通しているのは、「近代」的な社会体制、知の枠組の有効性が崩れ、既成概念では捉え切れぬ新しい時代が始まりつつあるという認識である。このような時代の転換期に当って、戦後日本40年の歩みの中で上述のような新しい時代への底流がいかに醸成されてきたのか、あるいは逆に、なしくずし的に新しさを追う中で何か置き忘れてきたものがあるのではないかを、改めて問い直すことが要請されている。具体的には、「豊かな」社会が実現したと言われ、国民の８割以上が「中流」意識をもち、一見知識人と大衆の差異が希薄化し、両者の間にクロス・オーバー現象が生じているように見える事態の中で、戦後日本のオピニオン・リーダーと目されてきた知識人たちの政治との関わり様はいかに評価され得るのか（安西）、かつて唱道された「市民社会」論、「市民運動」論は真に清算されたと言い得るのか（田中）、正の面でアメリカ民主主義を導入した戦後日本において国民の法意識はいかなる変容を遂げたのか、遂げていないのか（丸田）、負の面で戦後日本を規定してきたと思われる日本人の対ソ連観はいかなる質的転換を経てきたのか（小島）、戦争責任の問題は果たして大衆レベルで真に受け止められたと言い得るのか（大津）、消費社会で大衆にモノを売るためのコトバはいかなる変貌を遂げたのか（斧谷）等々の視点から、戦後日本の社会文化の基底を堀り下げていく予定である。

◉研究の特色

本研究チームの６名と、先発の「戦後日本の経済文化」チームの５名は、何れも、年少時に戦後民主主義の洗礼を受けた世代であり、様々な生活体験を共有している。本研究の特色は、このような共通基盤を踏まえて、各研究員がそれぞれの専門領域から一歩踏み出し、学際的に戦後日本を考究しようとする点にある。その際、各人の専門領域の方法論を生かすことによって、評論的戦後社会論の域を超えて、社会科学的・人文科学的分析を行なうことができるであろう。何れにしても、戦後第一世代の、これだけ多様な分野の研究者が集まって戦後日本文化を共同研究する試みは、全国的にも稀有なことであろうと思われる。

◉総合研究として研究することの必要性

戦後日本の社会文化を多面的に捉えようとする本研究の場合、専門分野の異なる研究者の共同研究が必須の条件である。上述の共通体験を生かすにも、多面的な分野の文献・資料を踏まえつつ、各人の個人的体験を摺り合わせていってこそ、共通の研究基盤（フレームワーク）が形成されていくのである。

◉研究チームと研究の分担（◦は研究幹事）

安西　敏三（法）戦後政治考
田中　秀夫（経）「市民社会」論の現在
丸田　　隆（法）戦後日本の法文化――司法への国民参加をめぐって――
小島　修一（経）戦後日本のソ連観
大津　真作（文）戦争責任――大衆レベルにおけるその位相――
◦斧谷彌守一（文）戦後日本におけるモノとコトバの関係――広告表現の変貌――

不確実性下の意志決定モデル ― その経済・経営への応用 ―

◉研究内容の概要

個人あるいは組織が意志決定を行うに際して、多くの場合、それはなんらかの不確実性の環境のもとにある。不確実な状況に対しては、可能な予想を形成して合理的意志決定を行うことになるが、その予想の失敗によって、そのもとで決定した行動はなんらかの損失を招く。すなわち、多くの場合、意志決定はリスクを伴うことになる。本研究は、リスク下での合理的意志決定モデルの経済・経営分野への適用、及び新しいモデルの開発

を目的とする。研究内容は次の三つから成り立っている。

(1) リスク下での合理的経済行動の理論モデルの設定とそれによる定性的分析

既存のモデルの検討、期待効用最大化基準の再考、リスク下での市場メカニズムのworkingについての考察等を経て、特に需要不確実性の場合のマクロ経済、ミクロ経済の行動に関する理論モデルを作成し、それによる定性分析を通じて、リスク下での採るべき政策を考察する。

(2) 需要測定モデルの開発とそのシミュレーション分析

交通あるいは通信ネットワーク上のサービス需要の予側モデルを開発し、シミュレーション分析を行ないながら予測精度の向上のためにモデルの改良を重ねていく。

(3) マイクロ・コンピューター用の対話型意志決定システムの開発及びその応用

意志決定者とモデル作成者の間の専門的情報の交流を通して、意志決定システムを一体化し、両者の間の対話型意志決定のシステムを開発し、市場予測への応用を試みる。

◉研究の特色

不確実な状況の中での合理的経済行動の研究は、マクロ経済、ミクロ経済のいずれにおいても比較的少なく、特に需要不確実性に直面した場合の企業行動や価格（マクロ的には物価）不確実性の下でのマクロ経済政策の効果についての分析は今後精力的に試みられるべきことである。

本研究は、まさしく、それらを目的としており、将来市場の需要動向を予側し、かつ対話型意志決定システムを適用することによってミクロ的経済意志決定、マクロ的政策決定に資すること大であると期待される。

◉総合研究として研究することの必要性

既述したような本研究の目的には、分析用具として、数理計画、多目的計画、確率過程、オペレーション・リサーチの各手法の利用及び新しい手法の開発が必要である。また、適用対象が経済・経営という独自の世界であるため、それらの固有のシステムへの理解、すなわち、経済・経営の知識を必要とすることは云うまでもない。したがって、分析手法と適用対象からして、学際的な協力があってこそ実りあるモデル開発と応用が期待される。

◉研究チームと研究の分担（◦は研究幹事）

小林　清晃（経）需要不確実性下の経済行動の分析
佐藤　治正（経）不確実性下における政策シミュレーション
布上　康夫（営）不確実性下における憲法決定支援システムに関する研究
中山　弘隆（理）多属性効用分析と会話型意志決定支援システムの開発
中森　義輝（理）対話型モデリング・システムの開発と、その予側、計画問題への応用
◦下条　哲司（理）勘の思考過程を顕在化し、対話を通じてより完全な決定に接近するシステムを追求
大野　勝久（名古屋工大）需要予側モデルの開発をシミュレーション分析

お知らせ

⊙第5回総合研究所公開講演会

「新しいライフサイエンスを探る ― 分子レベルで見た自然― 」

コロンビア大学教授　中西香爾氏

5月22日(金)午後3時から　10号館2階　1021教室

⊙研究所叢書の発行

叢書1．平生釟三郎の日記に関する基礎的研究　S.61.9発行
叢書2．ピアノ自動演奏システムの作成と演奏表現の定量的分析　S.62.3発行
叢書3．医用高分子材料の合成と評価　S.62.1発行
叢書4．経済システムにおける数理モデルの分析と手法、S.62.2発行
叢書5．ECにおける多国籍企業経営と政府規制に関する研究　S.62.3発行

上記の各叢書入手ご希望の方は、総合研究所にお申し出下さい。